

# 告 辞

卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。

皆さんは、小学校6年間の学びを無事終えられ、今ここに、卒業証書を受け取られました。これは、皆さんが多くの方に支えられ、勉学や運動に<sup>はげ</sup>励み、努力されてきた結果です。

さて、今日は、筆を口にくわえて文字や絵をかき、1,000点もの多くの作品を生み出した<sup>ほしのとみひろ</sup>星野富弘さんを紹介します。

幼い頃から運動が得意だった星野さんは、中学校の体育教師になりました。しかし、2か月後、器械体操の指導中に、首の骨を折り、首から下を動かすことができなくなってしまいます。「もう二度と体を動かすことはできない。」と絶望する中、入院中に仲良くなった友達へ手紙を書こうと、初めて、ペンを口にくわえます。しかし、やっと書けたのは、ぽつんとついた小さな点だけでした。

一度は<sup>あきら</sup>諦めた星野さんでしたが、手紙を書きたいという強い思いに突き動かされ、半年後、再び挑戦します。あまりに力を入れていたので、ペンをくわえる口の中は、血がにじむほどでした。

そしてついに、カタカナの「ア」を書くことに成功します。たった<sup>ひとつ</sup>一文字であっても、星野さんには、この上ない喜びとなりました。「もう一度、始めよう。」希望の光が差し込んだ瞬間でした。

その後、<sup>こ</sup>書ける文字が増え、文となり詩となり、家族が絶やさず枕元に活けてくれた花も、その言葉に添えて<sup>えが</sup>描くようになりました。

後日、星野さんは、次のように話しています。

「けがをして、すべてを失ったと思ったが、気がつくと、私にはまだたくさん残されているような気がした。見ること話すこと、喜

びや悲しみを感じられる心、感謝できる心。体は不自由になったが、自由な心が残っていた。」

文字を書き始めて6年半、まわりの人たちの<sup>すす</sup>勧めで、展覧会を開催します。作品は人々に大きな感動を与え、海外での展覧会の開催や美術館の設立へと、その輪が広がっていきました。星野さん自身も、自分に寄せられた優しい心に出会い、勇気づけられたのです。

皆さんの人生にも、困難が、立ちほだかることがあるでしょう。しかし、それに立ち向かおうと努力したり、違う見方をしてみたり、時には別の道を選んだりする経験が、豊かな自分を作っていきます。星野さんのように、人との出会いを力に変えながら、自分を成長させ、誰かの支えになれる人であってください。それはきっと、皆さんの人生の希望へとつながっていくはずです。

最後になりましたが、校長先生をはじめ、諸先生方、数々の御支援をいただきました、保護者の皆様や地域の皆様、関係の方々に、深く感謝申し上げますとともに、卒業生の皆さんが、健やかに成長されることを心からお祈りしまして、告辞といたします。

令和7年3月19日

鈴鹿市教育委員会